



## 汽車

汽車はガッシュガッシュと重い音を立てながら、半ば朽ちかけているような白樺の林の中を走り続けていた。

乗客は既におらず、残るのは私を含めた四人の乗務員だけなのだが、それでも汽車は走っていた。

私に始発の駅の記憶などなく、いやそう言っては正確には嘘になる。確かに始発はあったのだ。しかし私はそれを忘れていて、それからただ途中途中でいくつもの駅に立ち寄り、人を乗せ、人を降ろし、そうして汽車は走り続けてきたわけで、私にはそのおぼろげな記憶だけが残っていたのだった。

釜焚きの小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

私が汽車に乗ったのは、あれはいつのことだったろう。そんなことも、もう思い出せず、他の三人はどこで乗ったのであったのか、それももう忘れてしまった。昔はいろんな事があったような気もするのだが、何があったのかは覚えていない。

しかしそんなことを考えているとなぜか後悔とも絶望とも思えるような暗い感情がじわじわと頭の中に渦巻いてくるものだから、私は無理矢理目の前の圧力ゲージをにらみつけて、ただその針の動きだけに集中していたのだった。

すると、最後の駅を通り過ぎたのがいつのことであったのか、そんなろくでもないことを言い出したのが口数の多い機関士の四谷で、私はわざとそれを聞こえないふりをしていたのに、そういえばそうなのだと余計な返事をしたのが客室係の京子だった。

おかげでみんなして現在と過去を振り返り、確かに最後に停車した駅はどこであったのか、いつであったのか、それはもう忘却の果てに沈みそうな過去の話だから、こうなると残るはもう終着駅しかないのではなかろうかと気味の悪い不安がどっと押し寄せてきたのである。

しかし小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

そんなことがなぜ不安かといえ、それは終着駅に何が待っているのかということだ。終着と言うからにはそこで終わりという事で、さて、それがハッピーエンドであるならばよろしかろうが、どうにもそうは思えない。どだい駅にハッピーな何かなど期待する方がおかしいので、しかし逆に考えれば単なる駅に何か悪いことが待っているはずもなかろうが、一番ありそうなのが結局終着駅に何も無いということで、そうなると今まで私ら一体全体何をしてきたんだ、そうしてこれからどうすればいいのだ、ということになるから、それはそれで一つの悪いことであろうと思われるのだ。

私はまだ若いのに、まだこんなに若いのに、本当にこれで終わってしまうのだろうか。そんな恐怖に襲われる。

そうした思いは私だけでなく、あるいは私の方から以心伝心伝染したものかもしれないが、一気にみな一様に同じ思いに捕らわれてしまったものだった。

しかし小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

だから私は暗い思いでなるべくなるべくそのことを頭から閉め出して、ただひらすらに圧力ゲージを見つめることに没頭しようと試みるわけなのに、そうした人の気を知らぬ四谷が言うのだ。

「次が終点なのだろうか、終点だとしたら何があるのだろうか、そもそも何かあるのだろうか」と、それは自らの不安を和らげるべく発した悲痛な叫びであったのかもしれないが、そんな言葉を繰り返し繰り返し誰彼かまわず訴えかけるものだから、聞かれた方がたまったものではない。ただでさえ憂鬱なところにとどめの一撃をこれでもかと食らわされるようなものだから、もういかげんにしてくれたまえ、と愚痴の一つも出ようというものだ。

すると四谷は、こんな天下の一大事を話しているのにそんな態度はないだろう。あんたも車長であるのだからなんか答える義務があろうと、人の気も知らないことを言うものだから、その言葉がまた私の胸にグサグサと突き刺さってきてたまらない。

「確かにそりゃそうだ、天下の一大事とのお言葉、ものすごく胸に突き刺さりました。そのとおり。そのとおりだからすごく痛いんです。痛いんですからもう止めてくれませんか」

その皮肉めいた物言いにはさしもの四谷も傷ついたらしく恨みがましい目つきをして押し黙ってしまったが、それで納得できたはずはないので、その内面にはやっぱり不安と恐怖が渦巻いているはずで、それは私だって京子だって同じ事ではあるのだった。

しかし小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

四谷の言葉で動揺した私らが考えているのは、いや考えまいとしても考えてしまうのはただ終着駅のことだけで、そこにいつ着くのか、何があるのか。線路が途切れて壁でもあればこの汽車が激突するのは必定で、しかもそれがいつ起こるのか、今この一瞬の後かもしれないではないか。いや、それともそれは遠い先の話であるのだろうか、あまりに遠く、私は終着駅に着く前に死んでしまうのではあるまいか。そう考えるのもいやである。

しかし小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

この男は、と私は小峰を考える。無頓着にもほどがあろう。一心不乱ではあるのだが、さりとして熱心なのとはちと違う。ただ黙々とシャツ一枚の上半身に薪を放り込む度にその口を開ける竈の炎がカツと照りはえて、汗と油にまみれた肌が光っている。そうしてますます無表情に、何のためらいもなく、薪をくべる。薪をくべる。一体何を考えているのかその無表情な細長い顔からは全くもって推測しかねる。

だからこの男はこういうものなのだ、と普段話しかける者もなく、いわば居ていないような扱いを受けているというのに本人にはその自覚があるのかどうかさえわからない。

そんなことを考えているとその小峰がいきなりゆうと腕を突き出してきたから驚いた。薪を一本握っている。一瞬殴られるのかと思ったが、そのようなことをされる覚えもなく無論それは錯覚であった。その手は毎日毎日朝から晩までの力仕事を一身に引き受けて、皮膚はひび割れてゴツゴツと頑丈で、爪の間が黒かった。

「薪がない」

彼は無感動にそう言った。それは残念とも要求とも憤慨とも縁遠い単なる事実の告知であったが、そうか、薪がないんか、私はちょうどいましがたの皆とのやりとりで大いに動揺していたし、不毛な不安から気をそらせたかったこともあり車を止めることにした。

車輪が線路のつなぎ目を越える音がゴトンゴトンと間遠くなってやがて車が止まると私と四谷と小峰が斧を持って降り立った。

そこはやはり半ば朽ちかけた白樺の林であり、それはいつでもそうなのだ。細かく見れば違うのかもしれないが、いちいちそんな酔狂な観察をするわけもなし、いつ止まってもその風景は同じようにしか見えず、だからそれもまた不毛の一因であるのだった。

毎度の作業に嫌気がさしている私と四谷の動きは緩慢であったが小峰だけは例によって釜焚きの要領と同じ熱情を持ってこれと定めた白樺の木に斧を打ち込む。カターンカターンと大きな音が林の静寂の中を響く。なに、さしたる苦労はない。どうせ立ち枯れかけている白樺であるのだから切り倒すというよりはいつそ折れてしまうといった調子でたちまち小峰の通ったあとには倒木の列ができる。

私と四谷がそれを割って薪を作る。四谷は撫で肩と華奢な手足の小男だから斧を持ち上げる度にひよろひよろとふらついていて、こんだけ毎度毎度同じ作業をしているのだからいいかげんに要領も覚えるものだろうにと、これまた毎度のごとく京子に言われている。

その京子の仕事は単にそのできあがった薪を汽車まで運んで機関車の後ろに積み込むだけの話で、すでに乗客も皆無となった今では彼女の仕事はそれだけであるから楽なものであった。そんな楽をしておいて人のことを言うのもなんだかとも思うのであるが、そう言えばこの私だって

車長ではあるわけだが止まる駅とてなくなってしまった今となっては汽車の運行中は四谷の操る計器の針をにらみつけるほかに仕事もないのだからやはり楽であった。うっかり京子を責めたりしないでよかったのである。

それにつけても小峰の働くことが。そうしていったい何を考えているのやら、当人以外には全然見当もつかないから、自然とみなは彼の存在を忘れてしまって、もうそこにはいないと同じに考えていた。

それが理由なのか知らないが日頃から四谷はよく小峰に話しかけていた。それはひょっとすると私の計器とのにらめっこと同様、四谷もその不安と恐怖を紛らわすためにしていたことかもしれなかった。

「お前、汗、すごいぞ」

「火の粉がはねる。もちっとソツとできないのか」

「薪の入れすぎだ、入れすぎだ」

当然小峰からは何の反応もないのであったが、四谷はそんなことには全くかまわず四六時中そんな調子で一人でしゃべっているものだから、本人は独り言のつもりだったのかもしれない。

しかし小峰だって人間ではあるから時にはしゃべる。今しも四谷が例の調子で、

「ああ、そんな風に振っては斧の刃が欠ける」

と言うと突然小峰は振り返って、

「ああ!？」

と大声を出した。

四谷は腰を抜かしそうに驚いたが、これも時々あることで、しかし小峰が何のつもりでそんな声を上げたのか、聞きなおしているのか怒っているのか、不満の意を表明しているのか、いつでも全然不明であるから四谷はもちろん他の誰とて返事はしない。

すると小峰はもう白樺の木に向き直って何もなかったかのごとく無言で斧を振るうのであった。

だから私らは本当は全部で四人いるわけだが、小峰はもう好きにさせておくと暗黙の了解ができあがっているので人間の内にすら入れておらず、実質三人と勘定してしまっているような状態であるわけだった。

さて、そうして薪を積み終わればまた汽車は走り出す。その合図に私は汽笛の紐を引くのだが、このように終着駅の不安と恐怖が感じられてくると毎度の事ながらその手も重い。いっそ発車は止めにしてこのまま白樺林の中に走り込んでしまいたいような気持ちにすらなるのだった。

けれどもそれで救われようか。この汽車の速度ですら行けども行けどもただ同じ白樺の林、それをちょっと横っちょに走りだしたとて、そこには一体何が待っていようというのだ。何を期待していいというのだ。おおかた白樺林の樹海に迷ってのたれ死ぬのが関の山ではないのだろうか。

そんな悲観的な空想ばかりが浮かぶから私はそっとため息をついて、ちらと目を走らすと四谷も京子も思いは同じと目を背ける。ただ小峰だけが平気であるのか呆然としているのかその顔色だけは読みとれない。

力なく紐を引いた私の心と裏腹に野太い汽笛が響きわたると四谷が圧力弁を閉鎖する。すると汽車は静かに動き出す。

釜焚きの小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

ゲージの針がジリジリあがり、すると汽車の速度も増してくる。どんどんどんどん増してくる。そうして私は叫ぶのだ。

「全速前進ー！！」

すると四谷も、

「あい！全速前進ー！！」

と、復唱する。二人の声は悲痛であった。

しかし釜焚きの小峰は薪をくべている。細長い顔をしてほとんど口を開かない小峰はただ一心不乱に薪をくべている。

四谷はそんな小峰をしばらくの間ジーツと見ていたが、何を思ったのか、やおら袖をまくりあげると小峰と一緒に竈に薪を投げ込み始めたではないか。

「いったい何を始めたのか？」

私が問うと、四谷が答えた。

「他にすることがあるでなし！！」

四谷は何かを決心したような勢いでそう言ったので、言われてみればなるほどそれも一理ある。私も計器の針などみつめているより、そっちの方がなんぼかマシというものだと思えてきたから、ヨシッとこれを手伝いだした。

すると京子までが、私もするわ、と仲間に入り、とうとう三人して小峰の釜焚きの手伝いをすることになったのだ。

私も四谷も京子もそれぞれ薪をくべ始めたが、焦っているのでなかなか要領がつかめずに、薪は竈の縁に当たったり入り口に詰まったりしてしまう。

「違う！」

と、そのとき小峰が声をあげた。

「薪というのは左手で持つ。そうして右手で端を持って投げ入れる」

小峰の初めて聞く意味のあるせりふであったがなぜか誰も驚かなかった。なるほど言われたとおりにしてみると薪は面白いように竈の中心に放り込まれていく。

「そうだ、よし」

小峰に誉められて私たちは嬉しくなった。そうしてなんだかそう言う小峰はやけにたくましく

、頼りがいもありげに見え出したから不思議なものだ。

そうなのだ。薪なのだ。薪さえくべていればそれでいいのだ。終着駅など知ったことか。今日の前にある薪の山こそが私たちの全てであった。小峰を見習え、小峰を見習え。そんな風にすら思

えてきたからえらいものだ。いつもの不安と恐怖はどこにいったか跡形もない。

それから私と四谷と京子はさながら小峰の分身がごとく薪を竈に投げ入れ、また薪を竈に投げ入れ、その炎に照らし出された四人の姿はさながら燃える鬼のようだった。